

タイセイヨウクロマグロ 東大西洋

(Atlantic bluefin tuna *Thunnus thynnus*)



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

最近の動き

本資源を管理する ICCAT に報告された 2024 年の合計漁獲量は 39,426 トンであった。ICCAT 科学委員会 (SCRS) は、2022 年 9 月に資源評価を実施した。2022 年資源評価について SCRS は、推定された近年の親魚資源量及び増加傾向の程度が使用した 3 つのモデルで異なっており、全てのモデルで近年の加入の推定における不確実性が高いとして、資源評価結果に基づく TAC の勧告は作成していない。SCRS は資源評価の不確実性の高さを認識しており、特に東西資源が西経 45 度線を跨って回遊することで、いずれの海域でも両方の資源が漁獲され得ることから、海域で区分した資源評価に基づく TAC の設定は問題視されていた。これらの懸念を踏まえて、東西の資源が混在して漁獲されたことを仮定する資源解析モデルを用いた管理戦略評価 (MSE) のシミュレーションテストによって、資源の安全性や漁獲量等に関して定められた管理目標を満たすよう、資源の状態に応じて TAC が計算される管理方式 (MP) を開発した。東西各海域 5 つずつの資源量指数を統合した指標の基準年との差から TAC を決定する MP が 2022 年 11 月の ICCAT 年次会合において採択された。2025 年の ICCAT 年次会合では本 MP の計算に基づいて 48,403 トンを 2026 年から 2028 年の TAC として採択した。その内、日本の割当量は 3,559.41 トンである。

利用・用途

ほぼ全てが刺身やすし用途に用いられている。ヨーロッパでは、卵巣の塩漬け (からすみ) や背肉の塩漬けとしても利用される。

漁業の概要

主な漁業国は、直近 5 年の漁獲量の多い順にスペイン、フランス、イタリア、モロッコ、日本、チュニジア及びトルコである。日本の漁獲は全てはえ縄による。スペインは定置網と竿釣り漁業とまき網、フランス及びイタリアは地中海でまき網によ

って漁獲する。東大西洋のビスケー湾と地中海では小型魚 (2~5 歳) を漁獲している (Fromentin 2004, Santiago *et al.* 2016)。地中海では、1990 年代半ばより畜養を目的としたまき網漁業が盛んになったが、2007 年までのまき網漁獲量統計値の精度には疑問がある (ICCAT 2009)。

遺跡の発掘調査から、地中海において本種が紀元前 7000 年から獲られていたことが明らかになっている (Desse and Desse-Berset 1994)。フェニキア人、その後、ローマ人によって西地中海一帯で本種が手釣りや様々な種類の地びき網で漁獲されていた (Farrugio 1981, Mather *et al.* 1995, Doumenge 1998)。本種を対象とした漁業は中世に至っても盛んに行われていた。16 世紀頃には、地びき網が次第に定置網に置き換わっていった (Doumenge 1998, Ravier and Fromentin 2001)。定置網では、およそ 3000 年から 4000 年前より本種の漁獲が行われており、17 世紀以降、20 世紀半ばまで年間 1.5 万トンから 2 万トンの漁獲があった (Fromentin 1999, Fromentin *et al.* 2000)。

20 世紀の漁獲量は ICCAT の公式漁獲統計によれば (図 1)、1950 年から 1965 年には、主に北東大西洋における定置網やまき網で年間 3 万トン前後であった。地中海における主な漁業は、まき網及びはえ縄であり、特にまき網の漁獲量が全体の 6 割から 8 割を占めている。北東大西洋における主な漁業は、

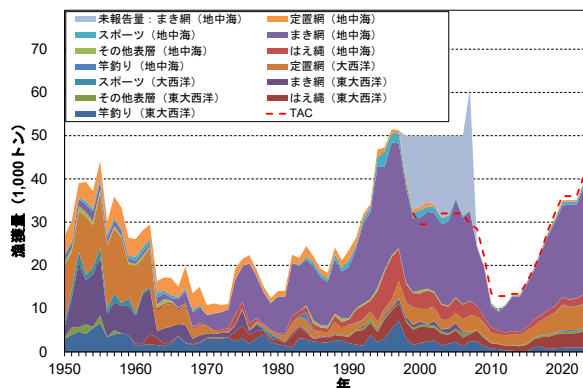


図 1. タイセイヨウクロマグロ (東系群) の漁法別海域別公式漁獲量の推移 (1950~2023 年) (ICCAT 2025) 漁獲量には投棄分も含まれる。灰色は資源評価に用いた地中海まき網による未報告漁獲量 (1998~2007 年) を示す。

はえ縄、定置網、釣り漁業である。

大西洋における本種を対象とした日本のはえ縄漁業は、カリブ海からブラジル沖の熱帯域で1963年頃から開始され、多い時には年間1万トン以上漁獲していたが、その漁場は数年間で消滅した。この漁場に分布していた魚群が大西洋の東西どちらの系群に属していたかは不明であるが、現在の水域区分では主に西大西洋となる。その後は地中海及びジブラルタル海峡付近が主要な漁場となった。漁期は地中海が4~7月(6月は禁漁)、ジブラルタル海峡付近では3~6月であった。1990年以降、冬季の西経35~45度、北緯35度以北(北大西洋中央部)の新たな漁場が開発された。さらに1998年以降にはアイスランドやフェロー諸島付近に8~11月にかけて漁場が形成され、年間千トンを超える漁獲が記録された。現在の日本のはえ縄の主要漁場はアイルランド付近となっており、主な漁期は9~11月である。

地中海西部におけるスペイン及びモロッコの定置網では3~7月が盛漁期である。地中海における現在のまき網の漁期は5月19日から7月1日に制限されているが、規制強化前にはフランス、イタリアでは6~9月、トルコでは10~2月、チュニジアでは1~5月が盛漁期であった。

本資源のICCATへの公式報告漁獲量は1990年代以降、1996年の約5万トンまで急増し、それ以降ICCATが設定したTAC(約2万~約3.6万トン)前後で推移してきた。増減の大部分は地中海での漁獲によるものである。しかしながら2008年にSCRSは、1998~2007年の公式報告漁獲量には深刻な過少報告が存在することを指摘し(ICCAT 2009)、地中海で操業する漁船数とCPUEに基づいて未報告漁獲量を含む全体の漁獲量を推定した。推定された漁獲量は、1998~2006年には約5万トン、2007年には約6.1万トン(公式報告漁獲量は3.3万トン)であった(図1)。2017年のSCRSでは、未報告漁獲量は地中海におけるまき網によるものと仮定し、これらの推定値を公式報告漁獲量として扱うこととした(ICCAT 2017)。2022年のSCRSで、これらの未報告漁獲量における魚体サイズの情報を見直した結果、従来の想定より大きな個体が中心であったと結論付けた(ICCAT 2022a)。

ICCATは、タイセイヨウクロマグロ東西両系群の国際取引を禁止するワシントン条約(CITES)附属書Iへの掲載提案(2010年3月にCITES締約国会議において否決)を機に、2010~2014年のTACを約1.3万トンとし、管理措置の強化に取り組んだ。そのため漁獲量は約1万~約1.3万トンで推移し、2011年には過去最低水準(9,776トン)を記録した。2015年以降はSCRSにおいて本資源の回復が確認されているため、TACを増加させた結果、2015年から2024年の期間で公式報告漁獲量は16,215トンから39,426トンまで増加した(ICCAT 2025)。日本の漁獲量は、2010年以降1,100トン前後で推移したが、2015年以降資源の回復に伴って漁獲枠が増加している。2024漁期年は2,959トンの漁獲があった。なお、日本は自国のはえ縄漁業の操業実態に合わせて、漁獲枠管理に8月から翌7月の漁期年を用いていることから、ここに表記した漁獲量も漁期年での集計である。

生物学的特性

タイセイヨウクロマグロ東系群の年齢は背鰭棘の輪紋から推定されており、タイセイヨウクロマグロ西系群と同様に、成長につれて雄が雌より大きくなる。2015年のSCRSにおいて、従来の資源評価で用いられていた東系群の体長体重関係式(ICCAT 1984)は、主要な漁業国・地域の科学オプザーバーによる14万個体以上のデータから推定した関係式に更新された。雌雄を区別しない成長式と各年齢の体長(尾叉長)及び体重(全重量)を図2に示す。各関係式は以下のとおりである。

$$L_t = 318.85(1 - e^{-0.093(t+0.97)}) \quad (\text{Cort 1991})$$

$$\text{体重} = 0.0000350801 \times \text{体長}^{2.878451}$$

(Rodriguez-Marin *et al.* 2015)

漁獲物の最大体長は330cm、最大体重は725kg、最高年齢は約40歳である。各年齢時の体長及び体重は、1歳で53cm(3kg)、3歳で98cm(18~19kg)、5歳で136cm(45~51kg)、10歳で204cm(146~176kg)である(Cort 1991)(図2)。近年、上記の年齢-体長関係は耳石の輪紋を用いて再評価され、従来よりも遅い成長であることが示唆されていた。

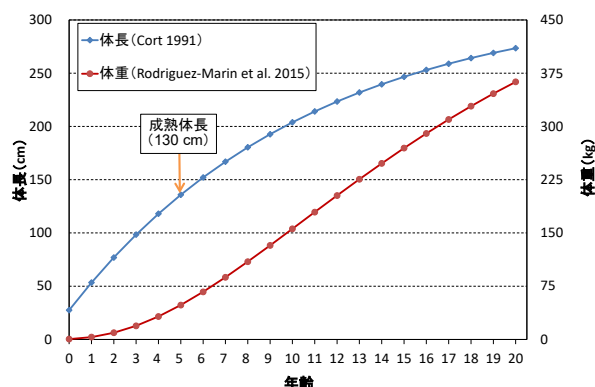


図2. タイセイヨウクロマグロ(東系群)の年齢あたりの体長(青線)と体重(赤線)(ICCAT 2017) 図中の矢印は成熟体長を表す。

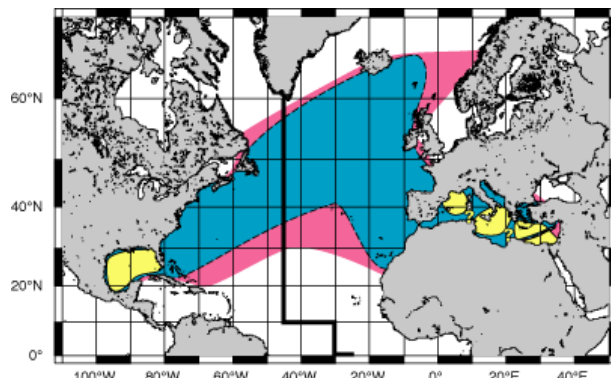


図3. タイセイヨウクロマグロの分布域(赤)と主要漁場(青)、産卵場(黄) 縦太線は東西の系群の境界。索餌場は産卵場を除く分布域。

しかし、この評価はまだ暫定的なものであることから、現行の資源評価では従来通りの背鰭棘を用いた成長式が使用されている。

本種の卵は分離浮性卵で、受精卵の直径は約1mmである。従来、マジョルカ島からシチリア島にかけての地中海で6~8月に産卵すると考えられてきたが、地中海東部海域でも本系群の卵稚仔の分布が確認されていることから (Karakulak *et al.* 2004, Oray and Karakulak 2005)、より広範囲に産卵場が形成されているものと考えられる。本系群では、3歳で一部の雌が産卵を開始し、5歳で全ての雌が産卵に参加すると考えられている。産卵数は尾叉長200~250cmの成魚で2,000万~3,800万粒と報告されている (Rodriguez-Roda 1967)。

本種は温帯域を中心に北大西洋全域に広く分布し (図3)、他のマグロ類に比べて沿岸にも来遊する。地中海で孵化した稚魚は成長しながら地中海に広く分散する。一部はジブラルタル海峡を経てビスケー湾等の東大西洋に回遊する。ビスケー湾からは西大西洋の北米沖へ移動した例が通常型の標識放流結果から示されている。

現在まで20年以上にわたり、本種は西経45度線で東西2つに分け、東側海域を東系群、西側海域を西系群として、系群ごとに管理されてきた (図3)。しかし、1990年代以降に行われた通常標識や電子標識の放流再捕結果から、東西系群は北大西洋において混合して広く回遊を行うことが示された (Block *et al.* 2005)。また、ポリ塩化ビフェニル (PCB) の体内含有量を指標として用いた研究では、地中海生まれの東系群が2~3歳までに米国東岸へ回遊することが報告されている (Dickhut *et al.* 2009)。耳石中心部分の酸素安定同位体比を用いた研究 (Boustany *et al.* 2007, Carlsson *et al.* 2007) によると、地中海で漁獲された本種の大型魚はほぼ全て東系群であった一方、西系群の漁場とされる米国東岸沖の索餌場で漁獲された未成魚 (69~119cm) の62%は地中海生まれの東系群であり、大型魚 (>250cm) はほぼ全てがメキシコ湾生まれの西系群であったことが報告されている (ICCAT 2011)。さらに、最近の研究 (Rooker *et al.* 2019) では、それらの混合率が大きく年変動していると判明した。また、遺伝情報を用いた研究 (Rodríguez-Ezpeleta *et al.* 2019, Puncher *et al.* 2022) でも、西側海域に東系群の個体が多く回遊していることが示された。

最新の研究では耳石の酸素安定同位体比と遺伝情報を統合して解析する手法が提案され、個体ごとの東西系群判別手法の高度化が検討されている (Brophy *et al.* 2020)。これらの結果は、本種が、現行の系群境界である西経45度線を越えて移動し、東西それぞれの海域の漁獲物に、両系群の魚が含まれている可能性を示唆している。西経45度で東西2つの系群に分けて管理する現在の方法の改善には、系群の混合率の継続的なモニタリング及びこれを考慮した系群別の資源量の推定と管理手法の開発が必要とされる。

本系群の胃内容物には魚類や甲殻類、頭足類等幅広い種類の生物が見られ、特定の餌料に対する嗜好性はないようである (Ortiz de Zarate and Cort 1986, Logan *et al.* 2011)。仔稚魚期には、魚類に限らず多くの捕食者がいるものと思われるが、あまり情報は得られていない。地中海の仔魚では共食いをしている例も報告されている (Uriarte *et al.* 2019)。遊泳力がついた後も、マグロ類を含む魚食性の大型浮魚類により捕食されるが、体長50cm以上に成長すると、捕食者は大型のカジキ類、サメ類、歯鯨類等に限られるものと思われる (Guinet *et al.* 2007)。

資源状態

本系群の資源評価は、SCRSにおいて、加盟国・地域の研究者の共同作業で実施される。生まれ海域が異なる系群を分けて評価する方法は確立されておらず、西経45度線を境とするそれぞれのエリアに分布する本種の資源量を推定している。2022年9月に実施した資源評価は2017年の資源評価の設定を基に、最新のデータを取り込んで行われた (ICCAT 2022b)。なお、ICCATでは、本資源の管理基準値として、再生産関係が必要とせず、経験的に安全とされる $F_{0.1}$ を、最大持続生産量 (MSY) を実現する漁獲死亡係数 F_{MSY} の代替値として使用している (ICCAT 2022b)。

2022年9月の資源評価では、2017年資源評価で用いた ADAPT VPA に加えて、新たに2つの統合モデルも使い、合計3つの手法について、それぞれ ICCAT 公認プログラムを使って解析した。また、資源量指数には2017年の資源評価で使用した日本はえ縄 CPUE 等8種類に加えて、地中海西部や中央部から西側海域で実施された航空目視調査の指標を追加した (図

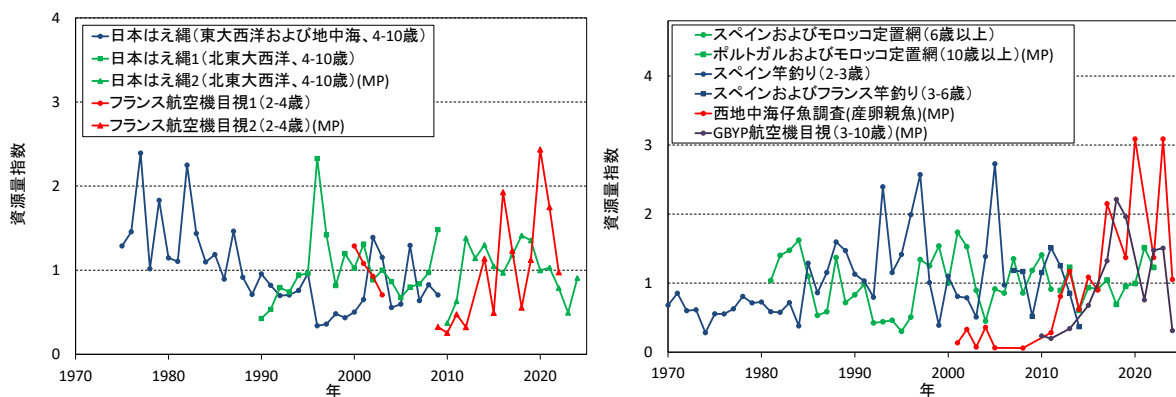


図4. 2022年の資源評価に用いたタイセイヨウクロマグロ (東系群) の資源量指数 (1970~2024年, ICCAT 2025) それぞれの時系列データの平均を1としてスケール化した指標を示す。(MP)と付記している指数は現在 TAC の計算に用いている。

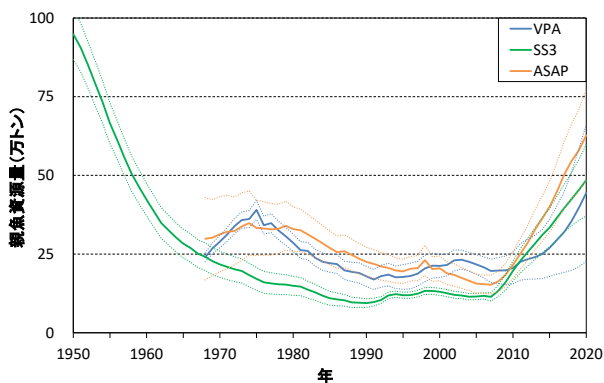


図5. タイセイヨウクロマグロ（東系群）の親魚資源量の推移 (ICCAT 2022b)

破線はそれぞれ同色の推定結果の95%信頼区間を示す。

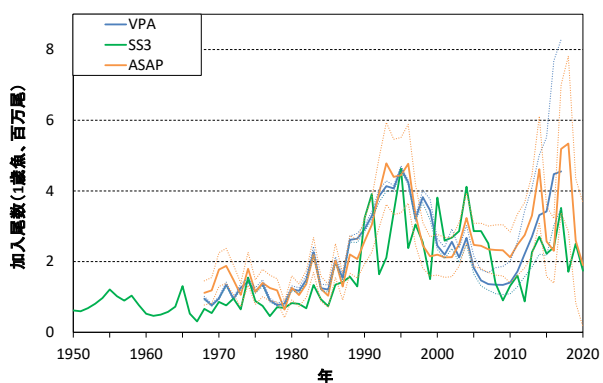


図6. タイセイヨウクロマグロ（東系群）の加入尾数（1歳魚）の推移 (ICCAT 2022b)

破線はそれぞれ同色の推定結果の95%信頼区間を示す。VPAのみ直近3年の推定値の不確実性が高いとして2017年までの加入を示す。SS3の信頼区間は技術的な問題により推定が困難であり、SCRSのレポートに従い掲載しない。

4)。ADAPT VPAには1968年から2020年までの年齢別漁獲尾数（1～10+歳）及び資源量指数を入力データとしてVPA-2BOX (Porch 2003)を用いた。また、複数種類の入力データと生物学的過程を一括して統計的に扱ういわゆる統合モデルには、1968年から2020年までの年齢別漁獲尾数（1～16+歳）及び資源量指数を入力データとしてASAP (Legault and Restrepo 1999)を、1950年から2020年までの漁獲量、漁獲物の体長組成、体長別年齢組成データ及び資源量指数を入力データとしてSS3 (Methot and Wetzel 2013)を使用して解析を行った。それぞれのモデルで推定された親魚資源量（3歳以上の成熟個体；SSB）、加入量及び漁獲死亡係数（2～5歳及び10歳以上）をそれぞれ、図5～7に示す (ICCAT 2022b)。

VPAやASAPで推定された1968年以降のSSB（図5）は、1970年代半ばに約35万トンとなった後、VPAでは1991年に歴史的最低値（約17万トン）となり、2010年頃まで横ばいで推移、ASAPでは2007年に歴史的最低値（約15万トン）となった。SS3で推定されたSSBは1950年以降減少を続け、1990年に歴史的最低値（約9.4万トン）となった後、2000年代後半まで低い資源状態が続いた（図5）。2000年代後半からは、いずれのモデルも増加傾向を示し、特にSS3とASAPでは急激な増加が確認された。加入尾数はVPA、SS3、ASAP全ての

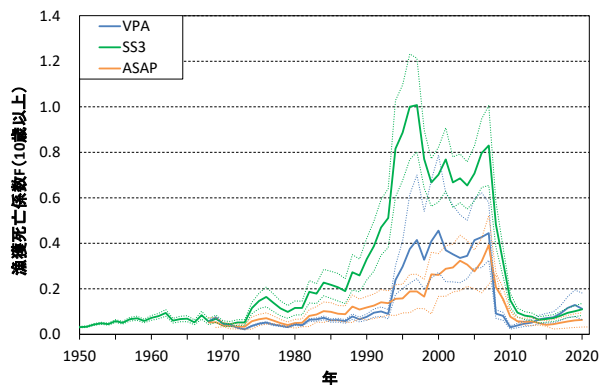
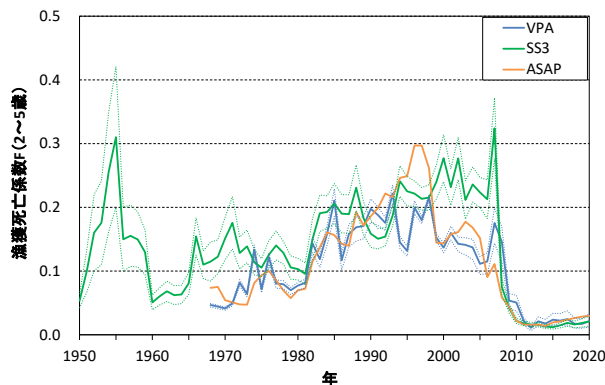


図7. タイセイヨウクロマグロ（東系群）の2～5歳（上図）及び10歳以上（下図）の漁獲死亡係数F (ICCAT 2022b) 破線はそれぞれ同色の推定結果の95%信頼区間を示す。ASAPの2～5歳魚の漁獲死亡における信頼区間は技術的な問題により推定が困難であり、SCRSのレポートに従い掲載しない。

モデルで1980年代中頃までは低水準で推移した後、1990年以降大きく年変動しながら高い水準の加入として推定された（図6）。若齢魚（2～5歳）の漁獲死亡係数（F）は、30kg未満の小型魚の漁獲制限の影響で2009年以降大きく減少した（図7上図）。また、高齢魚（10歳以上）の漁獲死亡係数は、1990年代半ば以降に急増したが、2008年以降は漁業規制の影響で減少した（図7下図）。近年（3つのモデルの2017～2020年の推定値の平均）のFは、 $F_{0.1}$ の0.81倍（0.48～1.62倍：95%信頼区間）と推定され、現状は過剰漁獲ではないと判断された。

2022年のSCRSは、今回の資源評価に用いた3つのモデルで近年のSSBの水準や増加傾向の程度が異なり、近年の加入量の推定値（図6破線）の不確実性が非常に高いことから資源評価に基づくTACの勧告を示さなかった。現行のTACが続くと仮定した短期間の将来予測と資源量指標を精査し、最近年の資源量の変動からは、現在の保存管理措置 (ICCAT 2022b) の修正を必要とするような傾向は見られないと結論付けた一方で、TACの勧告はMSEを通じて評価を受けたMPから算出された値に従うように勧告した。

管理方策

SCRSはMSEの目的のために、資源評価で用いた解析モデルとは別にM3 (ICCAT 2022a Appendix 6) と呼ばれるオペレーティングモデル (OM) を開発した。M3は、東西各海域に固有の産卵場所を有するタイセイヨウクロマグロ東西系群が西経45度の境を越えて回遊し、混合して漁獲される様子を表現している。これにより、一方の海域や系群の漁獲変動が、もう一方の海域や系群の資源量や漁獲に与える影響を計算できるようになった。M3で使用するモデルパラメーターの設定 (コンディショニング) には、1965年から2019年までの東西両海域の漁獲量や体長組成、各海域の資源評価で用いた17種類の資源量指数等、一般的な資源評価の入力データに加えて、耳石や遺伝情報から判別した漁獲物の系群組成並びに電子標識データから推定した四半期別の回遊データと整合するようパラメーターが推定される。また、期間中の平均的な資源量の水準や加入のレジームシフト等、既存の資源評価で不確実だとされていた要素に対して異なる条件を仮定した複数のモデルで、可能性のある多様な本種の資源動態を計算し、それらの様々な将来予測の下で設定された管理目標を達成するMPに、2022年11月のICCAT年次会合で合意した (ICCAT 2023)。このMPでは東西各海域5つずつの資源量指数の重みづけ平均を計算し、基準年と直近3年の指標の平均値の比率からTACが計算される。TACはMSEの評価で想定されていない例外的な状況が生じない限り、今後3年ごとにMPから算出された値に従って更新される。

2025年は採択されたMPに基づき、2022年から2024年の資源量指数を用いて、2026年から2028年のTACが計算された。その一方で、2025年4月に開催されたSCRSクロマグロ魚種別作業部会において、西系群を対象とした近親標識再捕法 (CKMR: Close-kin Mark Recapture) を用いて、2018年の西系群の8歳以上の資源量を約21,000トンと推定した結果が報告された。この結果は、MPの性能評価に用いたOMの仮定の内の1つである西側海域の平均的な資源量が低い仮定と矛盾しているとして、MPの適用における例外的な状況であるとの主張がなされた。他方で、異なるOMの仮定である西系群の平均的な資源量が高い仮定とCKMRの結果は整合性が高く、CKMRの結果はOMの不確実性の幅の範囲内であることから、例外的状況には当たらないとの主張もあり、SCRSでは例外的な状況かどうかの総意が定まらなかった。2025年のICCAT年次会合では、SCRSが例外的状況とは結論付けていないことから、現行のMPの通りにTACの計算を行い、48,403トンを2026年から2028年のTACとして採択した。その内、日本の割当量は3559.41トンである。

上記の年次会合で設定された漁期は、はえ縄については従前から変化がない (1月1日から5月31日 (ただし、地中海及び東部大西洋の一部 (西経10度以西、北緯42度以北、及びノルウェーEEZ内) は8月1日から1月31日)) まき網については、原則5月19日から7月1日 (従前から1週間延長) とされた他、東部地中海、畜養目的のカンタブリア海、アドリア海、ノルウェー及びアイスランドEEZ、モロッコ沿岸水域でそれぞれ異なる漁期が設定された。また、漁船隻数は、国・地

域別漁獲割当量の増加に応じて各国・地域で決定できるが、まき網漁船については原則、2018年水準から20%以上増加できないこととされた。さらに、まき網の操業時の魚群探査用の航空機利用は禁止、畜養目的のまき網漁船には100%オブザーバー監視が義務、小型魚を保護するために、体重30kg未満の漁獲・陸揚げ・販売が禁止されているが、東部大西洋の竿釣り・ひき縄、地中海の零細沿岸漁業による生鮮漁獲、アドリア海の畜養向けについては体重8kg以上まで漁獲が認められている。また、その他の規制として漁獲証明制度が導入されている。

畜養については、活け込み時の体長及びそこから推定される漁獲量に不確実性がある問題が指摘されており、従来からSCRSはステレオビデオカメラによる畜養魚活け込み時の体長測定技術の実用化を強く勧告してきた (ICCAT 2012, 2013)。これを受け、2012年のICCAT年次会合にて、2013年より全ての生簀においてステレオビデオカメラ、または同等の情報が得られる方法を義務付け、計測の際にはオブザーバー制度を導入し、管理体制を強化している。なお、ICCATでは近年、AIによる漁獲尾数と体長組成測定の自動化にも取り組んでいる (ICCAT 2025)。また2018年ICCAT年次会合では、活け込み時に漁獲報告のない魚を生簀に混ぜ込むことを防ぐ観点から、生簀内での本種の成長率表 (2009年にSCRSが作成) の見直しをSCRSに指示し、その結果、畜養環境下では天然海域に生息する個体より成長率が大きく従来の情報よりも成長率が高いことが報告された (ICCAT 2022b)。2025年SCRSでは、重複の問題から尾数測定には課題が残るものの体長測定は非常に高い精度で実施されているとして、まき網・定置網を問わず、漁獲後最初のケージの移動で、そのケージ内にあるバイオマスの量を計測すること及び、AI技術の活用により、これまでの20%サンプリング測定ではなく、100%の測定を推奨した (ICCAT 2025)。

日本は本種を漁獲する自国はえ縄船に対して日別の漁獲数量、個体別重量及び放流・投棄量の報告を義務付けていることから、漁獲した全個体の個体別重量等の漁獲データが得られるようになっていく。さらに科学オブザーバーを乗船させ、詳細な操業データ、生物測定データ、耳石等の生物サンプルの収集を行っている (Japan 2016)。ICCATでの資源評価においてこれらの精度の高い基礎的科学データは重要であり、日本のはえ縄CPUEは主要な資源量指数として重視されている。

執筆者

くろまぐろユニット

くろまぐろサブユニット

水産資源研究所 水産資源研究センター

広域性資源部まぐろ第1グループ

塚原 洋平・福田 漢生

参考文献

- Block, B.A., Teo, S.L.H., Walli, A., Boustany, A., Stokesbury, M.J.W., Farwell, C.J., Weng, K.C., Dewar, H., and Williams, T.D. 2005. Electronic tagging and population structure of Atlantic bluefin tuna. *Nature*, 434: 1121-1127.
- Boustany, A.M., Reeb, C.A., Teo, S.L.H., De Metrio, G., and Block,

- B.A. 2007. Genetic data and electronic tagging indicate that the Gulf of Mexico and Mediterranean Sea are reproductively isolated stocks of bluefin tuna (*Thunnus thynnus*). (SCRS/2006/89) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 60(4): 1154-1159.
- Brophy, D., Ezpeleta, N. R., Fraile, I., and Arrizabalaga, H. 2020. Combining genetic makers with stable isotopes in otoliths reveals complexity in the stock structure of Atlantic bluefin tuna (*Thunnus thynnus*)., Sci. Rep., 10: 14675. Doi: 10.1038/s41598-020-71355-6
- Carlsson, J., McDowell, J.R., Carlsson, J.E.L., and Graves, J.E. 2007. Genetic identity of YOY bluefin tuna from the eastern and western Atlantic spawning areas. J. Hered., 98(1): 23-28.
- Cort, J.L. 1991. Age and growth of the bluefin tuna *Thunnus thynnus* (L.) of the Northeast Atlantic. (SCRS/1990/66) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 35: 213-230.
- Desse, J., and Desse-Berset, N. 1994. Stratégies de pêche au 8^{ème} millénaire : les poissons de Cap Andreas Kastros (Chypre). In Le Brun, A. (ed.), Fouilles récentes à Khirokitia, Editions Recherche sur Civilisations, Paris, France. 335-360 pp.
- Dickhut, R.M., Deshpande, A.D., Cincinelli, A., Cochran, M.A., Corsolini, S., Brill, R.W., Secor, D.H., and Graves, J.E. 2009. North Atlantic bluefin tuna population dynamics delineated by organochlorine tracers. Environ. Sci. Technol., 43: 8522-8527.
- Doumenge, F. 1998. L'histoire des pêches thonières. Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 50(2): 753-803.
- Farrugio, H. 1981. Exploitation et dynamique des populations de thon rouge, *Thunnus thynnus* (Linné 1758), Atlanto-Méditerranéennes. Doctorat d'Etat. Université des Sciences et Techniques du Languedoc. 266 pp.
- Fromentin, J.M. 1999. Bluefin tuna stock assessment in the Northeast Atlantic. Problems related to data, methods and knowledge. (SCRS/98/74) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 49(2): 388-399.
- Fromentin, J.M. 2004. The 2002 size composition of bluefin tuna catches of the French purse seine compared to those of the early 1990s and 2001. (SCRS/2003/128) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 56(3): 1182-1188.
- Fromentin, J.M., Fonteneau, A., and Farrugio, H. 2000. Biological reference points and natural long-term fluctuations: The case of the eastern Atlantic bluefin tuna. (SCRS/1999/54) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 51(6): 2072-2083.
- Guinet, G., Domenici, P., de Stephanis, R., Barrett-Lennard, L., Ford, J.K.B., and Verborgh, P. 2007. Killer whale predation on bluefin tuna: exploring the hypothesis of the endurance-exhaustion technique. Mar. Ecol. Prog. Ser., 347: 111-119.
- ICCAT. 1984. Report of the bluefin tuna workshop, Japan September 1983. Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 19: 1-282.
- ICCAT. 2009. Report of the 2008 Atlantic bluefin tuna stock assessment session (Madrid, Spain-June 23 to July 4, 2008). (SCRS/2008/19) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 64(1): 1-352.
- ICCAT. 2011. Report for biennial period, 2010-11 PART I (2010) - Vol. 2. 265 pp.
- ICCAT. 2012. Report for biennial period, 2010-11 PART II (2011) - Vol. 2. 268 pp.
- ICCAT. 2013. Report for biennial period, 2012-13 PART I (2012) - Vol. 2. 296 pp.
- ICCAT. 2017. Report of the 2017 ICCAT bluefin tuna stock assessment session (Madrid, Spain, July 20-28, 2017). 106 pp.
- ICCAT. 2022a. Report of the 2022 eastern Atlantic and Mediterranean bluefin tuna data preparatory meeting (including MSE). (SCRS/2022/004) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 79(3): 1-140.
- ICCAT. 2022b. Report for biennial period, 2022-23 PART I (2022) - Vol. 2. 355 pp.
- ICCAT. 2023. Report for biennial period, 2022-2023 PART I (2022) - Vol. 1. 186-193 pp.
- ICCAT. 2025. Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Hybrid/Madrid (Spain), 29 September - 3 October 2025). 327 pp.
https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/REPORTS/2025_SCRS_ENG.pdf (2025年11月25日)
- Japan. 2016. Report of Japan's scientific observer program for tuna longline fishery in the Atlantic Ocean in the fishing years 2013 and 2014. (SCRS/2015/152) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 72(8): 2328-2338.
- Karakulak, S., Oray, I.K., Corriero, A., Deflorio, M., Santamaria, N., and Desantis, S. 2004. Evidence of a spawning area for the bluefin tuna (*Thunnus thynnus* L.) in the eastern Mediterranean. J. Appl. Ichthyol., 20: 318-320.
- Legault, C.M. and Restrepo, V.R. 1999. A flexible forward age-structured assessment program. (SCRS/1998/58) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 49(2): 246-253.
- Logan, J.M., Rodríguez-Marín, E., Goñi, N., Barreiro, S., Arrizabalaga, H., Golet, W., and Lutcavage, M.E. 2011. Diet of young Atlantic bluefin tuna (*Thunnus thynnus*) in eastern and western Atlantic foraging grounds. Mar. Biol., 158: 73-85.
- Mather, F.J., Mason Jr, J.M., and Jones, A. 1995. Historical document: life history and fisheries of Atlantic bluefin tuna. NOAA Technical Memorandum NMFS-SEFSC-370, Miami, USA. 165 pp.
- Methot, R. D. and Wetzel, C. 2013. Stock synthesis: A biological and statistical framework for fish stock assessment and fishery management, J. Fishres, 142. 86-99.
- Oray, I.K., and Karakulak, S. 2005. Further evidence of spawning of bluefin tuna (*Thunnus thynnus* L. 1758) and the tuna species (*Auxis rochei* Ris., 1810, *Euthynnus alletteratus* Raf., 1810) in the eastern Mediterranean Sea: preliminary results of TUNALEV larval survey in 2004. J. Appl. Ichthyol., 20: 318-320.
- Ortiz de Zarate, V., and Cort, J.L. 1986. Stomach contents study

of immature bluefin tuna in the Bay of Biscay. ICES-CM H: 26. 10 pp.

Porch, C.E. 2003. VPA-2BOX (Ver. 4.01). Assessment Program Documentation, ICCAT.
<http://www.iccat.int/en/AssessCatalog.htm> (2017年12月1日)

Puncher, G., Hanke, A., Busawon, D., Sylvester, E., Golet, W., Hamilton, L., and Pavey, S., 2022. Individual assignment of Atlantic bluefin tuna in the northwestern Atlantic Ocean using single nucleotide polymorphisms reveals an increasing proportion of migrants from the eastern Atlantic Ocean. *Can. J. Fish. Aquat. Sci.*, 79: 111-123.

Ravier, C., and Fromentin, J.M. 2001. Long-term fluctuations in the eastern Atlantic and Mediterranean bluefin tuna population. *ICES J. Mar. Sci.*, 58: 1299-1317.

Rodríguez-Ezpeleta, N., Díaz-Arce, N., Walter, J., Richardson, E., Rooker, J., Nøttestad, L., Hanke, A., Franks, J., Deguara, S., Lauretta, M., Addis, P., Varela, J., Fraile, I., Goñi, N., Abid, N., Alemany, F., Oray, I., Quattro, J., Sow, F., Itoh, T., Karakulak, F., Pascual-Alayón, P., Santos, M., Tsukahara, Y., Lutcavage, M., Fromentin, J., and Arrizabalaga, H. 2019. Determining natal origin for improved management of Atlantic bluefin tuna. *Front. Ecol. Environ.*, 17: 439-444.

Rodriguez-Marin, E., Ortiz, M., Ortiz de Urbina, J.M., Quella, P., Walter, J., Abid, N., Addis, P., Alot, E., Andrushchenko, I., Deguara, S., Di Natale, A., Gatt, M., Golet, W., Karakulak, S., Kimoto, A., Macias, D., Saber, S., Santos, M. N., and Zarrad, R. 2015. Atlantic Bluefin Tuna (*Thunnus thynnus*) Biometrics and Condition. *PLoS ONE*, 10(10): e0141478. Doi: 10.1371/journal.pone.0141478

Rodriguez-Roda, J. 1967. Fecundidad del atun, *Thunnus thynnus*(L.), de la costa sudatlantica de Espana. *Invest. Pesq.*, 31: 35-52.

Rooker, J., Fraile, I., Liu, H., Abid, N., Dance, M., Itoh, T., Kimoto, A., Tsukahara, Y., Rodriguez-Marin, E., and Arrizabalaga, H. 2019. Wide-ranging temporal variation in transoceanic movement and exchange of bluefin tuna in the North Atlantic Ocean. *Front. Mar. Sci.*, 6: 398. Doi: 10.3389/fmars.2019.00398

Santiago, J., Arrizabalaga, H., Ortiz, M., and Goñi, N. 2016. Updated standardized bluefin tuna CPUE index of the Bay of Biscay baitboat fishery (1952-2014). (SCRS/2015/169) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 72(7): 1694-1714.

Uriarte, A., Johnstone, C., Laiz-Carrión, R., García, A., Llopiz, J., Shiroza, A., Quintanilla, J., Lozano-Peral, D., Reglero, P., and Alemany, F. 2019. Evidence of density-dependent cannibalism in the diet of wild Atlantic bluefin tuna larvae (*Thunnus thynnus*) of the Balearic Sea (NW-Mediterranean). *Fish. Res.*, 212: 63-71.

タイセイヨウクロマグロ（東大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 (最近5年間)	3.5万~3.9万トン 最近(2024)年: 3.9万トン 平均: 3.7万トン(2020~2024年)
我が国の漁獲量*1 (最近5年間)	2,780~3,088トン 最近(2024)年: 2,981トン 平均: 2,900トン(2020~2024年)
資源評価の方法	ADAPT VPA、統合モデル ASAP、統合モデル SS3
資源の状態 (資源評価結果)	$F_{2017-2020}/F_{0.1}=0.81 [0.48-1.62]^*$ 近年(2017~2020年)の漁獲死亡係数に従うと過剰漁獲ではない。
管理目標	資源量をMSYを達成できるレベルに維持し、かつ、漁獲死亡係数をMSYを達成するレベル以下とする
管理措置	TAC 2026~2028年: 48,403トン(日本枠: 3,559.41トン)
管理機関・関係機関	ICCAT
最近の資源評価年	2022年
次回の資源評価年	2026年

*1 ICCAT(2025)に基づき暦年集計。

*2 VPAは2017年から2020年、SS3とASAPは2018年から2020年の平均値。
 代表値は、各モデルから不確実性を考慮して算出された値の幾何平均を使用。
 信頼区間は3つのモデルの95%信頼区間の内、最も低い又は最も高い値を採用。